

Building lifestyle around Ferrari

セルフプロデュースの行方

昔から自己アピールが苦手な筆者。自分の写真を誌面に載せるのはあまり好きではない。
しかし状況が人を作るという言葉もある。ならば2021年は……というお話。

その日のことは、よく覚えている。今からちょうど12年前となる2008年12月、私はイタリアにいた。まずはトリノに入り、午前1本インタビューを終えてから、午後はかのレオナルド・フィオラヴァンティ氏のスタジオを訪問。当時、平松潤一郎氏がオーダーしたワンオフ・フェラーリ、SP1のデザインをフィオラヴァンティ氏が担当したこともあり、インタビューを申し込んだのだ。

翌朝には氏の自宅まで押しかけ、彼の愛車であるシルバーの308GTBを撮影。バッテリーが上がっていて、皆でガレージから押して外に出したのは今だから書けるいい思い出だ。後にその308が日本へとやってきて、さらに本誌No.113の表紙を飾るとは、夢にも思わなかったが……。

自宅を後にして向かったのは、かつてトリノ・ショーが開かれていた会場で開催中のある展示会。入口にはピニンファリーナ・モデューロが置かれ……と書き始めると長いので以下割愛するが、この時点で十分に濃密だったのに、その後待っていたのはアルド・プロヴァローネさんのご自宅訪問という、とんでもないサプライズであった。彼と面識のあるコーディネーターの野口祐子さんが、近くなので自宅にいるようなら寄っていきましょうと、急きょセッティングしてくれたのだ。

しかし今となってみればだが、何の準備もなく"丸腰"で行ったことを酷く後悔している。通り一遍のことしか聞けず、結果、当時の記事はスペースも小さく、読み返すと恥ずかしくて仕方がない。確かに当時はモダンスーパーカーがメインコンテンツの媒体だったので知識も乏しく、準備できたかどうかは怪しい



が……。12年を経た今ならたくさん聞きたいことがあるのに、もうそれは叶わない。どうかプロヴァローネさん、安らかに。せめて60ページからの濃密な追悼記事を、氏に捧げたい。

さてSP1のベースとなったF430の頃と比べると、フェラーリのデザインも随分と洗練された。今回デビューを飾ったSF90スパイダーを見ると、隔世の感がある。かく言う筆者は12年で洗練はされていないが、少なくとも経験を重ねただけの引き出しは多くなった……と、文字にすると随分と地味だ。実のところ私は昔から自己アピールが苦手な仕事で、会社の自己評価シート記入がこの世で最も苦手な仕事。それが良いことなのか悪いことなのかはわからないが、最近、思い始めていることがある。

それが"セルフプロデュース"だ。もうすぐ48歳ということでもう12年足すと定年の年齢となり、セカンドキャリアなんて言葉も頭をよぎる。今の仕事は好きだし、編集をしていると生きている実感がある。このまま生涯編集者で行けたら、きっと幸せなことであろう。ならばそうあるために、もう少し自己アピールしてもいいのではないか。そう思い始めたのだ。

というわけで"セルフプロデュース"をテーマに書き始め、わざわざ自分の新旧写真を載せたものの、やはり何だか小恥ずかしい。それよりは、SF90スパイダーの情報や写真を掲載したほうがよかったのではないかと未だに迷っている……時点で、どうやら筆者のセルフプロデュースは前途多難のようだ。

文 ● 平井大介

text by Daisuke Hirai

写真 ● 齋藤 正 / 藤井元輔

photograph by Tadashi Saito / Motosuke Fujii

取材協力 ● フェラーリジャパン